

## ▲ ▲ ▲ コロナが収まったら行きたい山 ▲ ▲ ▲

### どんどん逃げてゆく山～モンブラン・デュ・タキユール 4248m



(エギュ・デュ・ミディからヴァレ・ブランシュ氷河を望む。右がモンブラン山群。左奥の針峰群はクライミングで有名なグランド・ジョラス。ヴァレ・ブランシュ氷河縦断終点エルブロンネルは写真中央コルのやや左の小岩峰。モンブラン山群とグランド・ジョラスを結ぶ稜線が仏伊国境線。手前がフランス側、向こう側がイタリア側)

**[最初にお断り]**

今年 2020 は年初からコロナ禍になり、感染拡大防止のために移動の自粛要請が出たので山にも行けなくなった。本稿は、その無聊を紛らわすために机上で夢想した幻夢譚である (2020 年 7 月記)。

今年 2020 年夏、岳友 3 人とスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼路を 3 週間ほど掛けて自転車で巡る旅を計画し、帰途独りでフランスのシャモニーに立ち寄って密かにモンブラン・デュ・タキユール 4248m 登頂を目論んでいたのであるが、残念ながらコロナ禍で行けず、予約していた現地のレンタルバイク屋やホテルなどのキャンセルに大汗を掻いただけに終わった。

さて、上の写真をご覧になってこれはどこかで見た山の風景だと思い出された方々も多いと思う。シャモニーの街からロープウェイに乗って一気に標高差 2800 ㍎を 20 分間で上昇したエギュ・デュ・ミディ山頂駅からシャモニーの街と反対側のヴァレ・ブランシュ氷河を見下したものである (短時間で一気に 3 千㍎近くを昇るので小生などは高山病気味になって吐き気と頭痛がしてくる)。

右側がモンブラン山群で、一番右奥の笠雲が掛っている白い峰が主峰モンブラン 4808m、一番手前のピラミッドがモンブラン・デュ・タキユール 4248m である。写真左側奥の針峰群はクライミングで有名なグランド・ジョラス 4208m である。これらを結ぶ山稜がフランス・イタリアの国境線となっており、稜線の手前側がフランス、向こう側がイタリア領である。

目の前のヴァレ・ブランシュ氷河は左方向に流れ、その先は有名なメール・ド・グラス氷河に流れ込んでいる。この氷河の出口には人工の氷河洞窟やクライミングで名高いグランド・ジョラス、ドリユなどの針峰がそそり立っているので、行かれた方も多いであろう。

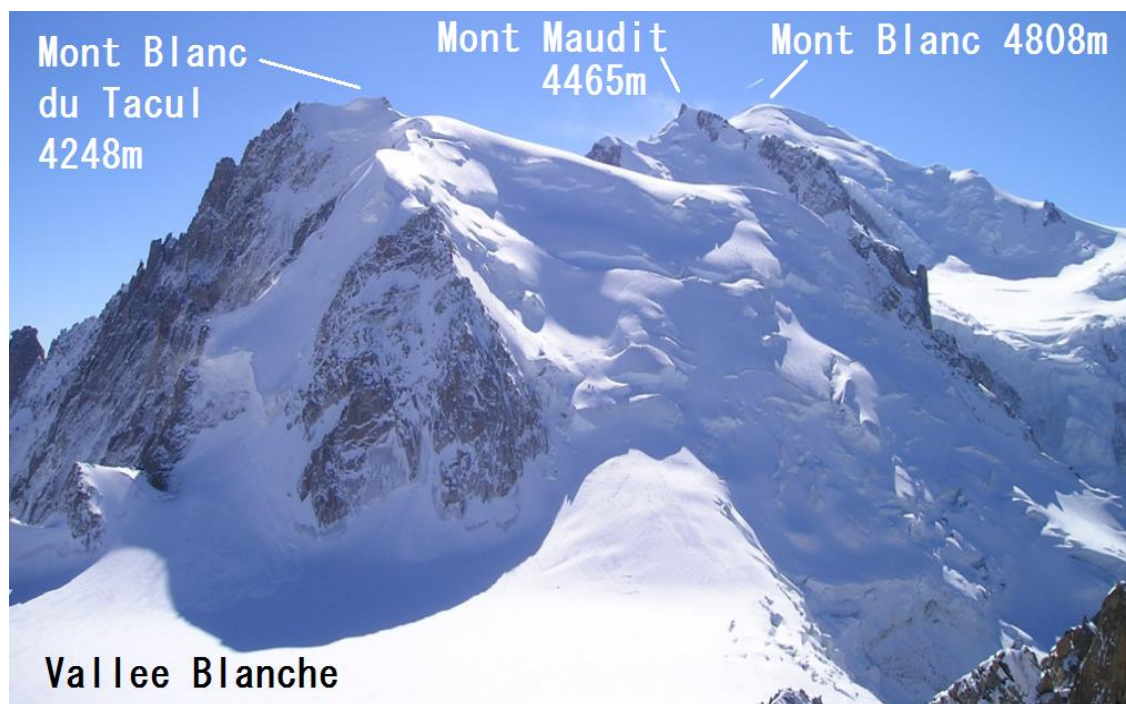
少し前置きが長くなった。このモンブラン・デュ・タキユールは主峰モンブランの前衛峰で、実は 6 年程前に同じ山の会の A さんのリードで、S、K さんとの 4 人で欧州アルプスに行った折の登頂目標の一つであったのだが、現地に着いてシャモニーの山岳情報センターで雪の状態などを尋ねると、ここ数日間は降雪が多くて雪崩のリスクが大きく、ガイド登山も含めてオール登山禁止にしているので、特にあなた方はガイドレスでもあるので絶対に入山してはいけないとアドバイスされ、代わりに薦められた少し手前の比較的安全なラシュナル峰 3616m へ転進したのだった。

昨年 2019 年夏には、学生時代からの友人と二人でエギュ・デュ・ミディからヴァレ・ブランシュ氷

河を縦断してイタリア側のエルブロンネルへ下るコースを目指したが、氷河上でホワイトアウトになり、我々の前を行くシェパード(盲導犬)役のガイドパーティーもリタイア、悲しいことにガイドレスの我々は前を歩くシェパード役が居なければホワイトアウトの中ではいつクレバスに墜ち込むか分からず、一応アンザイレンはしているものの、アラハ<sup>はち</sup>(around 80)の二人にはどちらかがクレバスに墜ち込めば我々にはセルフレスキューの余力は無いので、確保している方は明朝誰かが通り掛るまでそのままの確保体制で凍って居るしかなく、また落ち込んだ方もクレバスの中で“凍る体”になって、いずれにしても地元シャモニー・タイムスの明日の夕刊には「無謀な日本人老人2人、能力も弁えずモンブランでクレバス墜落凍死」という文字が躍っているであろうという恐怖から逃げるように引き返したのだった。

そこはヴァレ・ブランシュ氷河の真ん中辺りの場所だった。エギユ・デュ・ミディからここまで下るのは僅か2時間半程であったが、登り返しにはホワイトアウトの中でヒドゥン・クレバスの在所をチェックしながら恐る恐る歩を運んだこともあって、3倍の時間が掛かり、ガッカリしたものだった。翌日も再度挑戦したが、前日に勝る風雪でエギユ・デュ・ミディからの下り口の氷のトンネルの中で2時間程天候待ちをしてみたものの、前に並んで順番待ちをしているガイドパーティーも引き上げ始めたので、我々も退散せざるを得ないという残念な結果に終わった。

さて、コロナ禍の外出自粛を理由にトレーニングなどというものも全く行わず、かてて加えて先が見えないことへのノイローゼ症状による心身の退嬰から海外の雪の4千<sup>に</sup>峰に登れる自信は全く無いのであるが、何かを求めて先に進まないことには生きる瀬もないという訳で、来年夏に再度スペイン自転車巡礼を計画した帰りにヴァレ・ブランシュ氷河縦断のリベンジと、あわよくいえば更にモンブラン・デュ・タキユールも密かに狙おうと目論んでいるのであるが・・・。



(ヴァレ・ブランシュ氷河上部からモンブラン山群を望む)

前者は過去2回のトレースで氷河の大体の様子も分かったので、天候さえ良ければ何とかガイドレスのソロでも行けそうであるが、後者はかなりグレードが上がる。獲得標高が往路で約800m、帰路でも登り返し標高が400mほどあるので、4千<sup>に</sup>を越える標高でこれだけの高度を稼ぐにはかなりの鍛錬をしたとしてもコロナ太りで布袋様に変化した体ではたぶん体力がもたないであろうし、高度順応トレーニングの富士山も来年の夏山シーズンまではクローズであろうから、高度順応トレーニングもできないということにもなる。更にヤバイのは、小生はガイドレスの単独行であるから、ロープ確保なしの丸腰のソロで急雪壁やクレバス、セラック帯を通過できるかどうか。

上の写真にも見えるように急斜面の至る所にクレバスや大きな亀裂断層が走っているの、仮に登りはダブルアックスで何とかニジリ登れたとしても帰路の急斜面では懸垂下降の連続で下らなければならず、これらの操作がアタマも退化したアラハの軟弱な輩に耐えられるかどうか、また重いロープや懸垂支点用のスノーバーを何本も担ぎ上げねばならずこれらの重荷にも耐えられそうにない。金力と筋力に余裕がある人はガイドを頼めばこれらの問題は一気に解決するのであるが、懐も淋しくガイド組合の規定時間内に歩ける筋力も無い小生は如何ともしがたいのである。

いつだったか、半分冗談で弥次喜多道中で親しいAさんに相談してみた。彼曰く「マ、今の貴兄の体力では0.001%の勝率も無いナ。しかしながら、勝率ゼロの“幻”に高いコストを払ってまで挑もうとすることは普通では誰もやらない愚挙であるから、ま、その心意気は良しとしないでもないが、我が実力も弁えない些か癡癡老人の夢幻ではないか。無理をせずにモンブラン・デュ・タキュールへの登り口辺りで諦めて引き返し、エギュ・デュ・ミディのロープウェイ駅でビールでも飲んだ方がよろしいのではあるまいか。何ならモンブランの風神雷神サマに電話でお願いして当日朝に暴風雪を降らせて貰ってもいいよ、云々・・・カンヌン・・・」。実に的を得た有り難いお言葉。彼のアドバイスに従えば、往復たった3時間の氷河散歩！。ウン十万円？の大枚を払ったリターンは全くの零、涙も出ない。こんちきしょうメ。

小生も真面目に考えてみれば、トレーニング一つにしてもAさんのように毎晩布団の中で200回も腕立て伏せと腹筋をやるでもなく、またN先輩が精進しているような目標一点に絞った心技体の体系的な鍛錬などは足元にも及ばず、マ、言ってみれば思い付きも実行もエエコロ加減という塩梅であるから、風神雷神サマが暴れてくれた方が敗退の言い訳も立つということにもなるナ。

1年も前から懸かる態では登頂の可能性は0.0000001%も無いが、ま、コロナ禍で国内の山にも行けない鬱憤を晴らすネタとしては悪くない。現地の登山関係のHPを見るとルート図なども含めて山の写真も山ほど出てくるので、フランス語辞書を片手に“アッ、ウーん、??”と唸りつつ登った気分になったり、序にシャモニーの裏街の「接待を伴う夜の街」をヴァーチャルで探訪したりするのも悪くない。机の前に置いてある2台のPCの大スクリーンデスクトップ画面の壁紙にもモンブラン・デュ・タキュールやヴァレ・ブランシュ氷河の写真を定期的に入れ替えて想像を逞しくしているが、果たしてこの気力がいつまで保つかどうか。山がどんどん逃げてゆくような気もしてくるこの頃でもある。

